

かるーい読み物のページ

「猫の見た子供たち」

K・M・H

明治の小説家が、余り子供好きではないように思えるのは、私の偏見でしょうか。例えば、夏目漱石。何しろ、彼のデビュー作とされる『吾輩は猫である』に登場させられる子供像……。それは、子供嫌いらしい「猫」の目から描かれているせいか、何とも愚かしく滑稽でおせじにも「天使のよう」などとは言えそうもありません。

まずは、猫の目を借りて、作品の舞台たる主人一家の内側を覗いて見ましよう。

主人公は教師、この家には三人の子供がいます。

ご存じ、とん子、すん子、めん子のいずれも娘ばかり。彼女たちは、こんなご面相では大きくなったらどうするのだろうか、猫までが案じるほどの不器量娘で、長女のとん子は「南蛮鉄の刀の鏢のような輪郭」、次女のすん子は「琉球塗りの朱盆」、そして、「坊ば」と呼ばれる三女のめん子だけは、やたらに「横に長い顔」をしているようです。猫はその長さに呆れつつ、「いかに流行が変化しやすかったって、横に長い顔がはやることはなかるう」と評しています。

猫が呆れ返るのは、子供らの不器量ぶりだけでは
ありません。言語道断なのは彼らのわがままぶり……
。何しろ「自分のかつてな時は人を逆さにした
り、頭へ袋をかぶせたり、ほうり出したり、へっつ
いの中へ押し込んだりする。しかも吾輩のほうで少
しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追
回して迫害を加える」というわけです。



さらに、猫から見ると、人間はかなり愚かな生き
物のようですが、とりわけ、子供はその典型で、た
びたび猫たちを呆れさせています。例えば、長女の
とん子の言葉の間違ひと言ったら……。この娘はど
うやら「お茶の水の幼稚園」に通っているらしいの
ですが、本人は「お茶の味噌幼稚園」の生徒のつも
りです。七福神のお二人は「恵比須・大黒」ではな
くて「恵比須・台所(だいどころ)」ですし、「元禄

袖」ではなくて「双六袖」。裏店(うらだな)に
を勘違いして「わたしや藁だなの子じゃないわ」と
威張っていたようです。

ある朝の光景は、猫に、人間は自分たちより愚か
に相違ないと確信させます。主人夫婦がまだ寝てい
る時間に、起き出して来た二人の子供が、向かい
合って食卓に座りました。砂糖壺が真ん中に置いて
あったのです。上の子が、先ず、自分の皿に一匙、
すると小さいほうも姉のした通り、同じ分量を同じ
ように一匙。姉が、また一匙、妹が同じようにもう
一匙、続けて、姉が一匙、妹が負けずに一匙……。
そして、二人の皿には砂糖が山盛りになり、その
代わり壺の中は空っぽになったそのとき、主人が起
きてきたのでした。寝ぼけ眼をこすりこすり、主人
は食卓に近付き、二人の皿を取り上げると、せっか
くの砂糖をアツという間に元通りに壺の中に戻して
しまいました。二人の姉妹は、真剣そのもので精根
こめて分配した砂糖を、一度も嘗めるひまさえ無

かったのです。

猫は、しみじみと慨嘆します。「人間は、利己主義から割り出した公平という念は猫よりまさっているかもしれないが、知恵はかえて猫より劣っているようだ」と……。



ところでこの猫は、なかなか観察力にも優れているようです。何しろ、三人の子供の洗顔風景や、それに続く食卓の場面を何ともいきいきと描き出しているのですから。

朝の洗面所で、女の子三人が顔を洗っています。もっとも、顔を洗うと言ったって、上二人が幼稚園児、「坊ば」と自称する下の子に至っては姉のあとについて幼稚園にすら行けないほどの年齢ですから、まともなことが出来よう筈もないでしょう。坊ばなどは、バケツの中から濡れぞうきんを引っ張り

出して顔を撫で回し始めます。さすがに姉がたしなめてそれを取り上げると、坊ばは「いやーよ、ばぶ」とばかり、それをまた取り戻してしまいます。

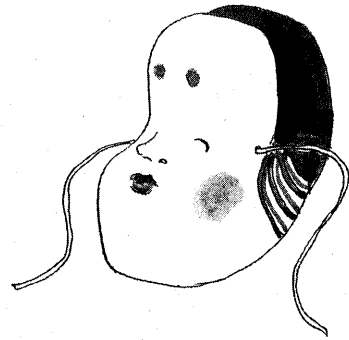
この「ばぶ」なる言葉は、いかなる語源に由来するのか、誰にもわからないのですが、坊ばが癩癩を起こしたとき、使用する特権的な言葉らしく、「ばぶ」の一言に皆が参ってしまうようです。「泣く子と地頭には勝てぬ」などいう、日本の諺を猫が知っているとも思えないのですが、どうやら、坊ばの「ばぶ」が神通力を持つらしいと、猫は見抜いてしまったのでしょうか。

長女と三女が、ぞうきんの顔拭きをめぐってごたついている間に、次女は、お白粉びんに指をつっこんでお化粧に余念がありません。白粉びんから取り出した白粉を鼻の頭にキュー。顔の真ん中に縦に一本、真っ白な線が通って鼻の在りかがハッキリしてきます。女の子は、そんな顔をきれいだと思ったのでしょうか、続けて頬に白い塊を塗り付ける……。

そこへとんで来た下女が、濡れた坊ばの着物を拭いたついでに、その子のせっかくのお化粧も、アッサリと拭き落としてしまいました。やれやれ……。

やがて、食事が始まります。坊ばはここでも傍若無人、自分の小さい茶碗が気に入らず、姉のを分捕って格闘します。何しろ、柄にもない大きな茶碗と長い箸ですから、扱いかねて暴威を逞しくせざるを得ないのでしょ。

二本の箸を一緒に握ったまま、うんとばかりに茶碗の中に突き立て、その箸を力一杯茶碗の底からはねあげて、小さな口の中に入るだけのご飯粒をかつこむ。はみ出した米粒は、鼻の頭と頬つべたと顎とに、ヤツとばかりに飛びつき、さらに、畳の上にもこぼれ落ちるといふことになるのですが、ご本人はそのくらいのことでは閉口するどころか、相変わらず暴威を振るい、えいヤツ、えいヤツと、ご飯茶碗との格闘を繰り返すのです。いやはや、無能無才の小人ほど、いやにのさばり出て柄にもない官職など欲



しがるものだが、その萌芽は既にこの坊ば時代から見られると、猫は洞察し、人間には教育や薰陶など効果がないのだと諦め顔です。

一方、姉のとん子は、坊ばのこの有り様に「あら坊ばちゃん、たいへんよ、顔がごぜん粒だらけよ」

と姉さん気分で注意し、坊ばの顔の掃除に取り掛かります。そして、一つ一つとご飯粒を取りのけつつ、それを口に運び、取っては食べ取っては食べして、とうとう妹の顔中のご飯粒を全部食べてしまいました。

ご飯粒を取って捨てるのではなくみんな口に入れてしまう、この思いがけない行動に、猫は、一寸だけ、びっくりしたようです。何しろ、こうした行動は、男性には、恐らく見られそうもないことなので「すから。つまり、とん子が示したのは、一種の母親的な振る舞い方で小さいながら自分は、れっきとした女性であると宣言しているということも出来るでしょう。」

しかし、この母性的なとん子も、実は、とんでもないことをしていました。妹の小さい茶碗で食べているものですから、すぐなくなってしまう。ご飯をよそっては空にし、よそっては空にし、さっさと四膳も食べ終えて、五膳目となると一寸迷いが起

きる、食べようかどうかというわけです。

とん子がやっと決心して、もう一膳食べようとご飯をよそおうとしたとき、一寸したハプニングが起りました。余り大量のご飯を小さな茶碗に押し込もうとしたために、ご飯の塊が畳の上に転げ出してしまったのです。ところが、彼女、悠々たるもの、驚く気色もなく、それを丁寧に拾い集めると、平然とお櫃の中に返してしまつたのでした。これには、猫も少々辟易、「少しきたくないようだ」と呆れ返つた次第でした。

傍らで、黙々とたくあんをかじっていて、これまで無難にすごしていたすん子にも、災難が訪れます。大好きな甘藷が味噌汁に入っていたため、喜んで勢いよく口の中にほうり込んだ途端、熱いものの、大人ですら火傷しそうな熱さだったからたまりません。彼女は「ワッ」と叫んで、口中のさつま芋を食卓の上に吐き出すという騒ぎになりました。

猫は、この情景に対して、皮肉たっぷりこんな

感想を述べます。「すん子のごとき、さつま芋に経験の乏しい者は、狼狽するわけである」と……。しかし、子供はさるもの、猫のしたり顔の解釈などご吹く風とばかりに、目の前に転がってきたさつま芋に感激した坊ばは、さっそく手掴みでむしゃむしゃとやり始めてしまいます。「さすが、子供たち」と拍手喝采したくなくというものではありませんか。



さて、こんな食事風景のなかで、子供たちの父親たるこの家の主人は、どうしていたかと言えば、一言も言わずに、専心ご飯を食べ汁を飲み楊枝を使っていたとあります。「娘の教育に関して絶対放任主義をとるつもりと見える」と、猫は呆れて見せません。でも、恐らく、こうした日常の細々したことは、口をはさまないのが、明治の父親というもので

しょう。

でも、この父親、子供の成長に対して、必ずしも無関心ではないようです。三人の娘がまた大きくなったと思うと、後ろから追っ手に迫られるような気がするらしいと、猫が同情しているのですから。三人の娘たちをちゃんと嫁がせるまでは、何としても親の責任と考えているからなのでしょう。

そんなに心配なら、子供など作らなければよいのにと猫は思います。そして、「いらざることを捏造して自ら苦しんでいる人間」を、愚かしい者と哀れむのです。

ただし、こうした文章の背後からは、猫に哀れまれつつもわが子のことで心を労する、そこが人間の人間らしさであり人の親たる所以だと、猫ならぬ作者漱石の呟きが聞こえてくるのではないのでしょうか。